

Judith Wright の詩と Pioneer Women (1)

Judith Wright's Poems and Pioneer Women(1)

(1998年3月31日受理)

橋内幸子
Sachiko Hashiuchi

Key words : Judith Wright, Pioneer Women, オーストラリア性

I. はじめに

オーストラリアは、歴史的に見た場合、男性社会であることは明らかである。それは、イギリス政府が、アメリカが独立するまでは、アメリカに囚人を送り込んでいたのを、独立を機に、追放先に困り、急遽、オーストラリアに変更した時からの因縁である。大多数の囚人は男達で、後になって、自由移民が渡ってきた時も、やはり、まず単身でやって来ることが多かった。家族単位で移住してきても、未開拓の土地、内陸部の乾燥しきった苛酷な自然に対しては、男達が主導権を握り、女達は後からついていくしかなかった。しかし、女達が家族の衣食住の世話をすることは、必然的に大地に生きぬくことに他ならなかったわけで、その意味では、責任と覚悟を備えたメンタリティが養われる素地があったといえる。

Judith Wrightの詩行をたどる時、我々は、この広大な大陸に生きた過去の女性達の姿が彷彿としてくるのを感じる。酸化鉄の混じった赤土の上を歩き、家族を養い、年老いて、大地に骨を埋めていった女達が残した幻影や、その思いを語るつぶやきが、詩人の言葉となって表れている。なかでも、女性ならではの色彩感覚を駆使した詩や、自然の中に生きる道を見出し、最後には同化していった人間を描いた作品には、オーストラリア詩の独自性が際だっている。

I was born into a coloured country;
spider-webs in dew on feathered grass,
mountains blue as wrens,
valleys cupping sky in like a cradle,
christmas-beetles winged with buzzing opal;
finches, robins, gang-gangs, pardalotes

tossed the blossom in its red-streaked trees.¹⁾
("Reminiscence")

Listen. Listen,
latecomer to my country,
sharer in what I know
eater of wild manna.

There is
there was
a country
that spoke in the language of leaves.²⁾
("Falls country")

開拓者として、自然の豊かさに魅了されつつも、日々の生活の心配を心の内奥に秘め、子孫にその生き方を身を以て示した女達のことは、他の文献からも理解する必要がある。幸い、文化人類学の立場から、入植時代からの女性の生活を記録の形で詳述しているものがあり、本稿では、その文献、Jennifer Isaacsによる*Pioneer Women of the Bush and Outback*(1990)を参照することにする。

なお、今回は、オーストラリアに入植した人々全体の輪郭、次に開拓当時に形作られたオーストラリアの女性の原型ともいべき要素のごく一部を、たどってみることとする。Wrightの詩によって、祖先やその子孫達の姿が、いわゆる神話化の様相を帯びているのも、詩の言葉の力によるものである。現実の人間が、詩の言葉で描かれる時、普遍的な人間像に近づくのは、Wrightの意図するところであったに違いない。彼女はオーストラリア特有のモチーフを使い、人間の魂の領域を広げることのできた幸運な詩人であるといえる。

II. オーストラリアの初期開拓民の姿

初期開拓民にとって、オーストラリアの国土と自然は苛酷な試練を要求するものであった。その状況は、流刑植民地から自由入植地になっても変わっていない。オーストラリア大陸は、国土の広さゆえ、さまざまな気候帯が分布し、その風土は多種多様である。紺碧の海に四方を囲まれているため、美しい景観と豊かな海洋資源は、現在でも多くの人間を魅了する。一方、ひとたび上陸すれば、海岸線に沿って緑の樹木が生い茂り、他の大陸では見かけない動植物が見え隠れする。しかし、大陸の奥地に進むにつれ、乾燥度が高くなる。まず、雑木が点々としているブッシュが広がってくると、開拓も自然との戦いを意識せざるを得なくなる。さらに進むと、砂漠やアウトバックと呼ばれる赤土だらけの乾燥しきった土地が、開拓という介入を拒絶する。1793年に最初の自由移民が到着し、1797年にメリノ種の羊の輸入で牧羊業を中心として始まった開拓の歴史は、独自の文学

的モチーフになった。Judith Wrightが、この国の自然と人間との関わり合いに注目したのも当然であった。

Judith Wrightが、1953年に発表した詩集 *The Gateway* に収められた詩 “The Ancestors” は、大地を流れる川や植物に人間の歴史を写し込ませたものである。陽光に照り映える緑の草の間を、一滴一滴の水も光を反射しながら、川は流れる。かつて、我々も、その川を遡り、「鬱そうとした蔓と夜のような樹陰のもとに／果てしない時の中に閉じ込められたシダ」(the fern-trees locked in endless age/under the smothering vine and the tree's night) を見つけたことがあった。そのシダの大木は泥と石の中に根を張り、そのV字型に凹んだ幹には、人類の祖先とも言うべき存在の顔が刻印されているかのように見える。

That sad, pre-history, unexpectant face——
I hear the answering sound of my blood, I know
these primitive fathers waiting for rebirth
these children not yet born——the womb holds so
the moss-grown patience of the skull,
the old ape-knowledge of the embryo.³⁾

原初的な人類の、悲しみを帯びた、あきらめたように見える顔を見て、自分の身体を流れる血潮が呼応する音が聞こえる。つまり、これらの原始の父祖達は、再生の時を待っているのであり、まだ生まれてもいない子孫達は、母なる子宮の中で、猿程度の知識を持った胎児のまま留められているのである。これは、理解力と知識、及び自己表現能力を与えられたら開花する生命力の予感でもある。その静かな眠りは、「我々に、時のない夢想を与えつつ (up which we toiled into this timeless dream) 」, 川の源に集められ、無数の光が輝く流れとなって、生きている者の命を養って行くのである。

この詩に示された、まだ小川にもなっていない水源と、まだ人の形をなしていない姿は、共に脆さや危うさを感じさせはするが、未分化の状態が持つカオスのエネルギーを持っている。あらゆる事柄の始まりには、こうした動きへの予感がある。オーストラリアの歴史や人々の動勢も同様である。1770年にジェームス・クックがシドニーのボタニー湾に上陸して以来、流刑植民地の必要性やイギリス本国への輸型生産構造のため、さまざまな背景を持つ人間がこの大陸にやって来た。オーストラリアの地を踏んだ者は、やって来た理由が何であれ、そこで根をはやし、自己の領域を拡大させることを余儀なくされた。さまざまな困難と障害があったものの、彼等にとって、オーストラリアは「約束の地」であった。初期の詩集 *The Moving Image* (1946) の “Bullocky” は、牛追いの姿を借りて、未開の土地を進んで行く人々の精神と苦闘の末のある結末を描き出している。

Shirley Walkerによれば、この人物のモデルは、Wrightの家で働いていた牛追いである⁴⁾が、彼の姿を通じて、開拓民達が直面した苦しみや孤独が、人間を狂気へ追い込んでいく悲劇が語られ

ていく。たった一人で「重い肩をした牛の群れ」(his heavy-shouldered team) を率いて、長年、牛と共に、干ばつの渇きや冷たい雨に耐えてきたある日、牛追いの心は狂っていく。そして、その狂気の中で、彼は、自分を、Exodusの「老いたモーゼ」と思うようになる。

All the long straining journey grew
a mad apocalyptic dream
and he old Moses, and the slaves
his suffering and stubborn team.⁵⁾

牛の群れを追ったり、木々の下でテントを立てて過ごすうちに、彼は、聖書の世界に入り込んでいったのである。彼の目には、「悪魔や天使が、彼の道を通る」(fiends and angels used his road) のが見えたし、夜のテントの中からは、祈りや予言を呼ぶ彼の声が聞こえてきた。狂気は、その人が最後の砦としていたものを明らかにする。キリスト教の教義が民衆の心に刻印した存在や感受性は、恐怖と救いへの希求の両方へと追い立てていくことが多い。孤独と恐怖のうちに、正気を失い、正気を無くして、自分を越える人物を演じることができるようになる。この牛追いの場合も、牛ならぬ同胞を連れて、苦難の道を進んでいったモーゼのような存在になることにより、自分の苦しさや惨めさから逃避していったのである。

オーストラリアも、このような労働者階級の人々の苦役と犠牲の上に成り立っていると見える。一人一人、それぞれの孤独を道連れに、未踏のアウトバックを進んでいった後に、後の世代の人間に残したものは、やはり豊饒であった。我々の振り卸す鋤の刃に、死んだ彼等の骨が草の間から当る付近に、葡萄畑が広がっている。そこは、かつて、家畜の群れも通り過ぎたところでもある。

O vine, grow close upon that bone
and hold it with your rooted hand.
The prophet Moses feeds the grape,
and fruitful is the Promised Land.⁶⁾

葡萄の木が、その骨の上に育ち、「根っこの手で握っている」(hold it with your rooted hand) ようにと、詩人は呼びかける。彼女の故郷 Wallamumbi はニューイングランドの台地にあり、同じニューサウスウェールズ州のハンター・ヴァレーは、葡萄酒の産地で有名である。入植者達が、その地形と気候を利用して、葡萄の木を植え、大地の恵みである葡萄やワインを手に入れた。しかし、冒険と成功への夢を持ちながら、長く続く苦難の時と自然の苛酷さゆえに、牛や羊を引き連れた老モーゼ達の気は狂い、人知れず人生を終えていた。今、その豊かな大地、「約束の地」は、彼等が生きていた頃の夢と死後に残した骨により、豊かな収穫をもたらしている。

初期の入植から時が過ぎ、やがて町ができて、昔の人々の事は、過去の歴史の証人として、語

り継がれている。同じ詩集の“Country Town”では、かつてその地にやって来た人々が、何を見、どのように振るまったかが語られる。町ができる前に、この地に来た男達が目にしたのは、「辛い追放の身にとって、敵意に満ちた緑の国」(the sad green enemy country of their exile)であった。夜は、羊の番をしていても底冷えがした。ディンゴのどなるような遠吠えの音が聞こえる。東から忍び寄って来る霧は体を冷やした。囚人という烙印を押された男達は、掘っ立て小屋の中で起こした火の周りで、ラム酒を飲みながら、歌った。遠いイングランドのデボンシャーや、アイルランド、また、別れざるを得なかった愛する人を想って流す涙、捕縛の鎖や鞭、兵隊、などを歌ったのである。彼等の心には、周囲の美しい自然も入り込むことなく、ひたすら、後にした故国や人々のこと、及び辛い経験のみがあった。しかし、流刑の囚人、一獲千金を狙って海を渡ってきた流れ者、新しい土地で開拓を志した者達は、今は、土地の下で永遠の眠りにについている。

そして、今や風景は一変して、町が広がりつつある。

This is a landscape that the town creeps over;
a landscape safe with bitumen and banks.
The hostile hills are netted in with fences
and the roads lead to houses and the pictures.
Thunderbolt was killed by Constable Walker
long ago; the bones are buried, the story printed.⁷⁾

道路は整備され、家々は垣根で守られ、自然の脅威は以前ほど感じられなくなった。無法者は、かなり前に撃ち殺されて、埋葬され、そのいきさつは活字になった。

しかし、町の人々が寝静まった深夜、生きている人々の良心や不安の声に混じって、過去の人々の執念や疑いが、低いつぶやきの形で聞こえてくるのである。「我々が失って、後に残したものは何か？ 道はどこへ行くのか？ それは我々が期待したところではない。(What is it we have lost and left behind?/Where do the roads lead? It is not where we expected.)」金塊は採掘されているし、安全だが、その利益はどこにいつているのか？ 教会は建ち、主教も任命された。この安定を前に、我々はいかに異義申し立てをすればいいのか。鎖はますます頑丈になっている。この閉塞感を打開するためには何をすべきか？

Remember Thunderbolt, buried under the air-raid trenches.
Remember the bearded men singing of exile.
Remember the shepherds under their strange stars.⁸⁾

時代が変わり、安定の中にも、新しい試練は前に立ちはだかる。良くも悪くも、暴力や追放、孤独といった状況の植民地時代に生きた人間達のことを記憶に留めておくことが大切である。なぜなら

ば、彼等こそ、オーストラリアに渡って来た人々が直面せざるを得なかった困難に対して、それぞれの形で反応したモデルとなったからである。

ここまでのWrightの詩をたどってきて、初期の開拓の辛酸をテーマにした詩は、中心人物に相当する存在を男性にしたほうが、より適切であると詩人も感じているように思われる。しかし、後から、もしくは家族で移住した人々の中で、女性はどのように新世界たるオーストラリアに生き抜いていったのか。その肉声を、*Pioneer Women of the Bush and Outback* から拾ってみよう。Jessie S. Miller (1876-1942) は、夫と3人の子供たちと共に、1909年にイギリスから南クィーンズランドに渡って来た。提供された土地には、とうてい達成不可能な耕作上の条件が付いていたが、それを知らずに引き受けた一家には、やがて、その地から追放される運命が待っていた。1910年の4月に、Jessie はイギリスの親戚達に、こちらでの生活を伝える長文の手紙を出した。その当時、一家は、土地の上にキャンバスを吊っただけのテント風の家にもしくは、未完成の丸太小屋に寝起きしていた。しかし、その文面には、生活の不便さや不安よりも、女性特有の現実的対処、陽気さ、楽天的な精神、母性的な愛情が満ち溢れている。

I find plenty to do every day, beds to meke, tents to sweep and tidy,
plenty of cooking as the appetites are all very healthy. We just get
bread twice a week and not in quantity as it goes mouldy so quickly, so
I have much damper and scones to make. Butter has to be made, too,
and a hundred little things such as hunting the white ants. The
children have lessons every day and, I hope, are learning something to
keep them up until the time comes when they can go to boarding
school.⁹⁾

日々の衣食住の世話、子供の教育など、まず、手や頭を働かせて、家族のために尽くすことが、第一になるため、女性が不安や心配に心を乱される暇と余裕があまりなかったといえるだろう。そのうえ、生命力溢れる子供達は、彼女が勉強を教えている時でも、珍しい昆虫や変わった鳥達に心を奪われて、勉強に集中できなかった。彼等自身の生命力が、周囲に息づく自然の生命に呼応したのである。オーストラリアへの移民の子供達は、大人たちを困らせもしたが、そばにいてだけで、元気づけられる存在だった。アメリカの自然における、Mark TwainのHuckleberry Finnと同様である。子供達は、目の前にはいない動物を追いかけるまねをしたり、馬に乗っている気分ですり歩いたり、馬に乗っている気分ですり歩いたり、また、娘は、母親が留守の時、あまりに多くのパンやお菓子などを焼いたので、急遽、店を開いて、それらを売ったとか、Dickensの*Oliver Twist*を熱中して読んでいたか、エピソードは尽きない。

以上、文学作品に表れた初期の移民や開拓者の姿、及び実際の生活記録ともいえる手紙に書かれた家族の様子をみてきた。いずれも、オーストラリアに生きる人間達について、興味ある展開を示

している。遠く故国を出て、この大陸に上陸した人々は、独特の風土の中に生き抜いていく覚悟を持たねばならなかった。さまざまな人達が、次から次にやって来ては、それぞれの人生を生き、この地に骨を埋めた。このオーストラリアの特徴を示すために、Wright が、詩のモチーフに選んだのは、夢と挫折、希望と不安、自然の力と人間の営為、といった相反する局面を持った人間の歴史であった。そのうえ、現代詩人として、現代に生きる人間の感受性そのものも重複させた構造が、詩人の作品をより暗示的にしている。そのような場合、登場させる人物は、男性のほうがそのトーンを体現させやすいのも明らかである。先頭に立って、または一人で内陸部に消えていったのは、やはり男達だったからである。一方、大多数の女達は、時代や場所を問わず、与えられた条件のもとで生きるしかなかった。特に、家族や周囲の人間に対する実際的な責任、つまり、生命そのものを育て、守るといふ、まさにそのことにより、かえって大地に生き抜く力を得ることができたのである。*Pioneer Women* に記録された女性の手紙は、その証言である。

III. オーストラリアの女性達の肖像——結婚と家庭生活——

Pioneer Women に記載されている女性の記録はさまざまではあるが、文化人類学者である著者の基本姿勢は、一貫して、「オーストラリアの女性達は、実際にどのような生活をしたか」である。Wright も、移民の子孫としての視点で、周囲の女性達の姿を、自分の詩の中に織り込んでいった。彼女は、自分の母親や老いた女達、少女の心、実際の生活、子供に対する母親の気持ち、などを中心に具体的な像を描いた。その描き方には、共感と主張とが込められ、女性特有の力強さと優しさが共存している場合が多い。

それぞれのライフ・ステージの中で、オーストラリアの女性達が見せる人生の片鱗については、Wright の詩の中では、想像されたものというより、事実として、記録にも残しておきたいという願望の強さを感じさせるものがある。1973年に刊行された詩集 *Alive* 中の“Wedding Photograph, 1913”は、Wright 自身の両親が結婚した時に写した写真を見て、詩人が当時に想いを馳せながら書いたものである。両親は、「家の前で、二人並び、祝福の色紙のつぶてを受けて微笑んでいる田舎のカップル」(side by side, this country couple/ smiling confettied outside the family house-) として、まず紹介される。一族に囲まれて、新夫は、牧神のように耳が大きく、新婦は俯きかげんに淑やかなポーズで写っていた。ちょうど、第一次世界大戦の前夜、何かが起こりつつあった、その直前の和やかなシーンである。

しかし、娘である詩人にとっては、自分が生まれた後の記憶でしか、彼等を理解できない。というのも、二人には、やがて、子供ができて、父親と母親という「昔ながらの古いかたちにおさまった」(enter an old pattern) からである。その肩の上で泣いたツイードの服の匂いとか、ピクニックや叱責、お説教、ピアノの前で歌った歌など、子供時代のことは、覚えている。そして、優しかった母親は、鳥やパンジーを指差して、私に教えながらも、ひどくなりつつあった痛みと戦っていた。

—I know her

better from this averted girlish face
than in those memories death cut so short.

That was the most important thing she showed us—
that pain increases, death is final,
that people vanish.¹⁰⁾

死によって短くなった母の思い出よりも、この結婚式の写真に写っている母の俯きかげんの初々しい顔から、彼女そのものが分かると、Wright は語る。そして、母が身をもって示したなかで、最も重要なことは、苦しみは増し、最後に死がやって来て、人々は大地から消えていくという事実であった。

また、ここの詩行あたりから、過去と現在を知ることのできる詩人の視点が、二つの時制の間を行き来する。つまり、その写真には写っていないし、この時は母親も思いもしなかったが、彼女の後の再婚の相手である花婿が、その右手に立っているのが、二重写しとなって見えてくる。その屈託のない、陽気な彼の顔が、後年、公私両面で苦勞を経験して、だんだん曇ってくることも。一枚の写真といえども、見る人ひとりひとりの脳裏には、さまざまな想いが去来する。

Here in this photograph

stand two whom I can ponder. Let me join
taht happy crowd of cousins, sisters, parents,
brothers and friends. I lift a glass as well—
the greyhaired daughter whom you did not know.
The best of luck, young darlings.
Go on your honeymoon. Be happy always.¹¹⁾

結婚式に参列するために集まった人々、従兄弟や兄弟姉妹、両親、友人達の中に入って、一緒に二人を祝福できればと、詩人は思う。やがて生まれてくることになっている自分も、セピア色の濃淡に浮かび上がった群像のひとりとして、祝杯を挙げたいと願うのである。今、すでに、頭に霜を置く年代になっていても、この写真の人々が生きた時代に帰って、若い二人に声をかけてやりたいとも思う。「ハネムーンにいつてらっしゃい。これからもお幸せに」と。人間の連綿と続く営為が、男女を新しい単位として結びつけ、次の世代への掛け橋とすることへの信頼は、Wright のこの詩にも明らかである。

しかし、結婚の後は、男女を問わず、それぞれの仕事をし、役割を果たすべき日常生活が待っている。特に、妻となった女性には、家族の世話が中心となった基本的な役割が当然のように割り当

てられる。もちろん、愛という美名のもとに、一生続くもので、創造力や芸術性に目覚めた女性にとって、時に重荷になる役割ではある。1966年に発表された Wright の詩集 *The Other Half* に収録された詩、“Portrait”には、この気の遠くなるような繰り返しの中で、個としてのアイデンティティを失いかけた危機感が語られる。いわゆる、家庭生活の維持のための仕事は、そのことだけをとってみれば、女性に適したものである。しかし、時間的に分散して、取りかかる必要があることが多いだけに、他に集中を必要とするものを抱えている女性の場合は、ストレスが大きく、周囲との軋轢も深刻になっていく。家事も、もとはと言えば、やりたいと思ってやり始めたゲームのようなものだったと、彼女は言う。

It was a heartfelt game, when it began——
polish and cook and sew and mend, contrive,
move between sink and stove, keep flower-beds weeded——
all her love needed was that it was needed,
and merely living kept the blood alive.¹²⁾

愛情に満ちた役割として始めたことでも、倦怠は忍び寄る。床や家具を磨き、料理を作り、縫物や繕い物をし、工夫を重ねた。台所の流しとストーブの間を行き来し、花壇の草を取る。愛情と必要性のために、家族の命、つまり、「血縁」とでもいうものをあずかっていると確信したがためである。いつしか、その古い習慣が指令塔になって、自分の身体を動かしているのを知る。Wright の場合も、家庭人としての役割、また、詩人としての活動をいかにうまく両立させるか、この古くて、新しい課題を、詩の言葉を通しての自己認識という確認で解決していこうとする。

同じ詩集にある“To Another Housewife”でも、「血」は、生命と直結している。この詩は、子供時代に仲良しだった女友達に呼びかける形式で始まる。子供といえども、それぞれ、家での仕事を割り当てられ、その義務からは逃れようもなかった。彼女達の仕事は、友達の父親が飼っていた狩猟犬達に餌を与えることだった。オーストラリアには、狩猟用のウサギが他の大陸から持ち込まれ、現在では、その数が増え過ぎて、農作物への被害が大きくなったため問題化している。ともあれ、半ば飢えて、怒りのために鎖をちぎればかりに暴れ、吠え続ける大きな痩せた犬達は、少女達にはどんなに恐ろしく見えたであろうか。餌の代わりに、「私達、子供の手を食いちぎる」(to tear our childish hands instead!) かのようになり、感じるほどであった。子供達は、犬に怯え、餌用の、古い肉に嫌悪感を持ちながらも、その用事をやり遂げる。

With tomahawk and knife we hacked
the flyblown tatters of old meat,
gagged at their carcass-smell, and threw
the scraps and watched the hungry eat.

Then turning faint, we made a pact,
(two greensick girls), crossed hearts and swore
to touch no meat forever more.¹³⁾

昔から、北米インディアンが戦いや狩りに使ったトマホークと、ナイフを使って、死臭のために蠅がたかった古い肉を切り裂き、犬達に投げ与えた。気が遠くなりかけながら、二人は、十字を切って、もう、肉なんか絶対触らないと誓って、約束したものである。Wright 自身の経験ではあるが、それは、入植時代から、生きる為にやってきたこと、つまり、ある生命を殺し、他の生命の糧にすることである。

そして、家庭の主婦となった彼女達は、日々、その誓いや約束を反故にせざるを得ない。家族の命を養うために、家畜を殺し、その肉を料理しなくてはならないからである。

How many cuts of choice and prime
our housewife hands have dressed since then——
these hands with love and blood imbrued——
for daughters, sons, and hungry men!
How many creatures bred for food
we've raised and fattened for the time
they met at last the steaming knife
that serves the feast of death-in-life!¹⁴⁾

自分達の手は、家族への愛と殺した動物達の血とで装われている。娘や息子、そして、空腹を抱えた働き手たる男達のために、何度、肉を切り裂いたことか。また、一体、何匹の食用の家畜を育てて太らせ、時が来れば殺し、その血の滴るナイフを持っていたことか。「生の中の死」、つまり、人間が生きていくために死んだ生命が宿る御馳走を出すことが、女性のやるべき仕事だった。そして、母親としての詩人の目は、その料理を食べている子供達の鋭敏な感性の反応を見逃さない。食卓のそばのラジオから流れるニュースが、殺人、飢餓、聖戦といった内容を伝えるや、子供達は、断たれる生命のことを瞬間に理解する。そして、母親がかつて、斧とナイフを持って逡巡したように、思わずナイフとフォークを手を持って、立ってしまふ。人間と家畜の間であっても、人間の間であっても、血の流れることには違いはないからである。

ところで、開拓者達が口にした肉は、実際にはどのように処理され、彼等の食料とされたのだろうか。ここで、また、Isaacs の *Pioneer Women* を参照してみると、“Meat”の項目には、1920年代の記録が記載されている。オーストラリアでも、肉とパンが中心の食卓であり、足りない分は、野菜で補うという形をとっていた。当時、ニューサウスウェールズ州北部に土地を持っていた入植者の娘、Alyce O' Donnell は、その頃の家族の食事について、以下のように語っている。

“We had mutton three times a day——chops, cold meat and a joint for dinner. The first day’s breakfast was always lambs fry. Dad often had bubble and squeak as well. In summer Dad would put the meat cut up in a big dish of coarse salt, rub it well and then put it in a sugar bag that hung from the ceiling and the liquid would drip through the bag into a dish at the bottom. The meat would be used straight from the sugar bag. We lived on corned, boiled meat for the rest of the sheep.”¹⁵⁾

マトンを中心とした食事、その肉の保存方法については、他の地域においても同様であった。肉という、生鮮食品の保存については、温度と蠅の問題があった。生肉は、Wrightの詩にも示されているように、すぐに腐敗し、蠅がたかり、ひどい悪臭がした。母親達は、肉の匂いを抜くために、酢につけ、その後でよく洗い、数日間、川の流に浸しておいたこともあった。肉の処理ひとつとってみても、現代の先進国に住む、ごく一般の人間には、考えられない程の下準備が必要とされたことがわかる。そして、その仕事は、主に女性の手によって、なされていた。日々の生活のために、忍耐強く、繰り返す毎日は、確実にオーストラリアの女性の堅実さをも育てたに違いない。

各国の女性史が示す、その国特有の女性の生き方には、さまざまな要素が影響しているものである。オーストラリアの場合も、厳しい自然条件を背景に、前進するのみの人間の歴史がある。何もない場所で、家を建て、家族を養い、子孫に何かを残す、といったモデルは、やはり、この国の女性の精神風土を決定している。いつも、自然の恵みと脅威を感じつつ、限られた時間を生きる存在として、また、自分のこともさることながら、絶えず、他の人間の世話に心を砕く役割を持たされた人間として、彼女等は、Wrightの詩の中で、詩人の優しい眼差しで捉えられている。オーストラリアの女性は、アボリジニーの人々と同様、歴史的に弱者のグループに入っているからである。

IV. 終わりに

現代詩は、詩人の個性や芸術性を尊重するあまり、難解で自己完結という袋小路に入ってしまった感がある。元来、詩とは、連綿と続く人間のありさまを、新しい表現で描き、結果として言葉の可能性を広げるものである。言葉は、人間的要素、つまり、人そのものを描いた時に、共感を生み出し、長く人の心に定着する。その意味で、詩の言葉は、人の心に新しい感受性をもたらすものである。Judith Wrightの詩は、まず、伝えたい事柄があって、その内容にふさわしい言葉が選ばれているのであって、けっして、言葉が一人歩きはしていない。

オーストラリアの自然に生きる人間達、歴史に翻弄された人々、つつましく、しかし、誠実に暮らす人々など、Wrightが注目して、その詩行に写し出す人々のプロフィールはさまざまである。とりわけ、同性である女性に対して、個々の状況において、共感と同情の感情が一貫して流れてい

るのが良く分かる。一言でいえば、母性的愛情が底流をなしているのである。彼女の詩の言葉がいかに適切に選択されているか、今回はふれることができなかった。メタファーの巧みさ、頭韻の使用による音の美しさ、散文とも読める一節の中にも詩の持つ言葉の響き合いなど、現代詩人が彫琢の力を傾ける点においても、その現代性を発揮している。次回は、さらに、開拓当時の女性達の状況を、子供の誕生、孤独、老齡、死などの局面に分けて、該当する詩を取り上げていく予定である。

Notes

- 1) Judith Wright, *Collected Poems*(Angus & Robertson, 1994), p.329.
- 2) *Loc. cit.*
- 3) *Ibid.*, p.111.
- 4) Shirley Walker, *Flame and Shadow; A Study of Judith Wright's Poetry*(University of Queensland Press, 1991), p.20.
- 5) Judith Wright, *op. cit.*, p.17.
- 6) *Loc. cit.*
- 7) Judith Wright, *op. cit.*, p.14.
- 8) *Loc. cit.*
- 9) Jennifer Isaacs, *Pioneer Women of the Bush and Outback*(Lansdowne Press, 1990), p.19.
- 10) Judith Wright, *op. cit.*, p.327.
- 11) *Loc. cit.*
- 12) Judith Wright, *op. cit.*, p.251.
- 13) *Ibid.*, p.219.
- 14) *Loc. cit.*
- 15) Jennifer Isaacs, *op. cit.*, p. 86.

Bibliography

- 1) Bennett, Tony et. al. eds. *Celebrating the Nation: A Critical Study of Australia's Bicentenary*, St.Leonards: Allen & Unwin, 1992.
- 2) Cathcart, Michael. *Manning Clark's History of Australia*, Melbourne: Melbourne University Press, 1993.
- 3) N. グリーブ他編, 加藤愛子訳。『フェミニズムとオーストラリア』, 東京: 勁草書房, 1986。
- 4) Hampton, Susan & Kate LLewellyn eds. *The Penguin Book of Australian Women Poets*, Ringwood: Penguin Books Australia, 1986.
- 5) Hergenhan, Laurie ed. *The Penguin New Literary History of Australia*, Ringwood:

Penguin Books Australia, 1988.

- 6) Isaacs, Jeniffer. *Pioneer Women of the Bush and Outback*, Smithfeild: Gary Allen, 1990.
- 7) 石橋百代。『オーストラリアの女性』, 東京: ドメス出版, 1997。
- 8) Lever, Susan ed. *The Oxford Book of Australian Women's Verse*, Melbourne: OUP, 1995.
- 9) J. マーチン著, 古沢みよ訳。『オーストラリアの移民政策』, 東京: 勁草書房, 1987。
- 10) Rowe, Noel. *Modern Australian Poets*, Sydney: OUP, 1994.
- 11) 関根政美, 他著。『概説オーストラリア史』, 東京: 有斐閣, 1988。
- 12) G. シェリントン著, 加茂恵津子訳。『オーストラリアの移民』, 東京: 勁草書房, 1985。
- 13) Strauss, Jennifer. *The Oxford Book of Australian Love Poems*, Melbourne: OUP, 1993.
- 14) Page, Geoff. *A Reader's Guide to Contemporary Australian Poetry*, St. Lucia: University of Queensland Press, 1995.
- 15) Tranter, John & Philip Mead eds. *The Penguin Book of Modern Australian Poetry*, Ringwood: Penguin Books Australia, 1991.
- 16) Walker, Shirley. *Flame and Shadow: A Study of Judith Wright's Poetry*, St. Lucia: University of Queensland Press, 1991.
- 17) Wilde, William, et. al. eds. *The Oxford Companion to Australian Literature*, 2nd edition, Oxford: OUP, 1994.
- 18) Wright, Judith. *Collected Poems 1942-1985*, Auckland: Angus & Robertson, 1994.
- 19) Wright, Judith. *The Generation of Men*, Sydney: An Imprint Book, 1995.